



Club Palette Vol.47

カラーの最前線を歩く Vol.21

色をテーマにビジネスを創り出す!!

—カラーコーディネーターの知識と経験を糧に、仕事を展開・発信する秘訣とは?—

化学品を扱う専門商社・長瀬産業で働く水科智美さんは、カラーコーディネーター検定試験を3級から1級まで全て取得。それを仕事に活かし、ビジネスに結実させている。会社で扱う顔料の可能性をビジネスにつなげ、新しい活用法を提案し、時にはないものの開発にまでこぎつけるという、とてもクリエイティブな仕事に取り組む。多くのビジネスパートナーとつながり、色彩のプロとして大活躍する水科さんの仕事とは? やりがいとは何だろうか?



水科 智美 さん

長瀬産業株式会社 カラー&プロセッシング事業部
機能色材部/ポリマープロダクツ部
カラーコーディネーター
同社が2007年に創設した「NAW(ナガセアプリケーションワークショップ)」という自社ラボの立ち上げから関わる。色彩をテーマに同社が扱う化学品の活用を多数の企業に提案したり、ともに商品開発を行ったり、ビジネスにつなげる仕事を主に行う。最近では産学共同でのオープンイノベーションなども仕掛け、カラーコーディネーターとして積極的に活動を続けている。

カラーコーディネーターの検定試験に合格したのがきっかけで 大好きな色をテーマに新たな仕事に挑戦

—水科さんは、現在、長瀬産業のカラー&プロセッシング事業部でお仕事をされていますが、カラーコーディネーターの資格を活かしてクリエイティブなお仕事を多く展開されているとお聞きました。

長瀬産業という会社は、江戸時代末期に京都で染料を扱う問屋として創業し、現在は、化学品を扱う専門商社です。扱う化学素材は多岐にわたり、事業部がいくつも分かれています。いま、私が所属しているのはカラー&プロセッシング事業部です。現在私はその中で機能色材部と、ポリマープロダクツ部の2つの部署において、カラープランニングを中心とした仕事を、部署横断的に行っています。

入社当初は顔料などを扱う部署に一般事務職として入り、顔料添加剤のデリバリーアシスタントとして受発注をサポートする仕事をやっていましたが、もともとはインテリアコーディネーターになりたい、色が好きで勉強をしたいと思っていたので、カラーに関連する資格を自分で取ろうと考えました。そこで、カラーコーディネーター検定試験の3級を取得し、2級、1級第2分野と立て続けにすべての資格を取って、初めて上司に報告したのです。

すると、「せっかくそんなに難しい資格を取ったのなら、仕事に活かしたほうがいい」とアドバイスされたので、専門職に転換しました。現在では、カラーの知識と経験をベースに、社内で幅広い活動をさせてもらっています。



カラーコーディネータの資格を活かして活躍されている水科智美さん

—お仕事の内容を、具体的にお聞かせいただけますか？

一つは、コーディネートといいますか、つなぐ役目が多いですね。

たとえば、ブランドオーナーさんと「一緒に製品の色をつくっていきましょう！」という話になったときに、弊社から色の提案を実際にさせていただいたり、あるいはメーカーのデザイナーさんがイメージされている色を解釈して、弊社で扱っている加工メーカーさんの担当者の方にお伝えして、三者を一緒に結びつけ、ビジネスを展開するというようなことも行っています。弊社は商社ですから、原材料・加工材料を直接つくることはしていませんので、橋渡し役と申しますか…。

—「つなぐ」とは例えばどんなことでしょうか。

メーカーさんでも、デザイナーがいらっしゃるようなところは、色彩に関する言語をわりと理解されているので齟齬が少ないのですが、デザイナーさんがいなくて製作を行っている部署の方たちだけの場合ですと、色の言語というよりも比較的抽象的な言葉が使われることが多くなります。「もうちょっと軽く」とか「もうちょっとふわっとした感じ」とか。

そう言われても、現場の技術屋さんたちには伝わりづらいところがあって、そこに通訳的な役割の人間が必要で、まさに私の仕事となっています。

「この色を出すために、白をどのぐらい落として色を出してほしい」とか、具体的に色を現場の技術職の方にわかりやすい表現に変えて、お伝えするように心がけています。

色彩が提案の際の付加価値となる カラープランニングを実践に活かせる立場に

—しかも、単なる橋渡し役ではない。新しい商品を生み出すために、カラープランの提案もなさっているのですね？

はい。ちょうど私が事務職から専門職に転じたころ、すぐ上の上司とさらに上の上司が、いろいろと新しいことに挑戦したいと考え、女性の視点も加えてみてはどうか、と思っていたタイミングだったので、とてもラッキーでした。2007年に兵庫県尼崎市に弊社が、「NAW(ナガセアプリケーションワークショップ)」という自社ラボを立ち上げたころのことです。

当時は「カラー工房」と呼ばれていましたが、ここで実験を繰り返し新しい発想を加えることで、オリジナルの加飾・意匠技術をご提案したり、長年化学品専門商社として培った原材料や新素材の情報や技術を活かして、樹脂・塗料メーカーや塗装・成型メーカーなどのパートナー会社の、ユニークな加工技術と組み合わせたりするといった企画を進めてきました。

カラーソリューションというテーマは、まさに自分がやりたかったことでしたので、毎日、試行錯誤を繰り返しながら、さまざまなカラーサンプルをつくったり、色彩提案をさせていただいたりしました。

—原材料って、出来上がりがないとイメージがしづらいので、きっとその出来上がりの可能性を広げて可視化することが大事なんですよね？

そうですね。例えば、この素材にキラキラのパール顔料を入れたら、こんな表現になります。でも、ちょっと細かい違うパール原料にしてみたら、こんなにしっとりした感じになるんです、みたいなことをサンプルで提示しながら説明します。

色をコーティングする場合は、塗り重ねることで色はだいぶニュアンスが変わるので、下に敷く色を変えることで、こんなに変わるのだという例も、実際にサンプルを見ていただくことで、伝わりやすくしています。

—このオレンジのヴァリエーションのサンプルもすごく素敵ですね。

ありがとうございます。これは25色あって全部違うオレンジです。イベントで使うもので、スタンダードなオレンジをベースに25色のオレンジの展開を表現しました。

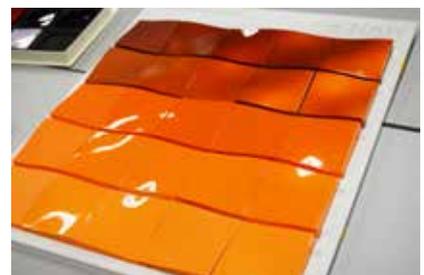
また、こういったサンプルの展開で、塗装とプラスチックという違う素材における色のコンビネーションをお示しすることもあります。違う素材を同じ色に見せるといった技術を要するもので、自動車のインテリアによく用いられる技術です。塗装の際は、綺麗にムラなく色が塗れるのですが、プラスチックに色を練り込む形で作る際には、同じような色の表現を試みても、なかなか難しい。いかに仕上がりに差がなくわからないようにするかの仕組みを考えるのがポイントです。最終的に出来上がりのイメージは一緒なんだけれども、素材が違うからそこをどうするか工夫が必要になってきます。



光輝性パール顔料のカラーサンプル



光の当たり具合で質感や色合いが微妙に変化



25色のオレンジ色のバリエーション

黒い光輝性パール顔料の開発を通じて 学んだ商社でしかできない ビジネスデザイン

—ご提案が実際の形となり、商品として世に出る喜びははかり知れないでしょうね。

実績として一つお話しすると、従来なかった光輝性の黒いパール顔料を開発したエピソードがあります。Black Diamondといますが、イメージする顔料が作れる原材料メーカーさんにパートナーとなってもらい、開発しブランドオーナーさんにご提案しました。

通常、パール顔料はガラスをベースにするか、雲母という石をベースにするかで、微妙な色のニュアンスが変わります。酸化チタンによる皮膜の厚さでも、光の反射の色が赤くなったり青くなったり変化します。光が入っても色が黒いままというのは、理論的には相反することで、あり得なかったのです。今まで黒いパール顔料というのはなかったのです。

それまでは、車で黒く光る塗装はピアノブラックが多かったものですから、弊社としては、ぜひとも黒い光輝材を開発したかった。

黒い素材に通常のパール顔料を塗装すると、光を反射するので白ボケして、グレーっぽくなります。思ったような黒には、どうしてもコントロールできませんでしたから、黒いパール顔料をどうしたら作れるのか、真剣に考えたのです。

弊社は商社でメーカーではありませんので、実際につくってくれそうな顔料メーカーさんに飛び込みをお願いをして、できたのがこのサンプルです。一方は雲母をベースにしている、光が当たると元が石なので、しっとりと光り、もう一方はガラスをベースにしている、キラッと光ります。今は調色していない状態ですが、調色すると、黒のニュアンスがもっと変わってきますから、表現の幅も広がります。

Black Diamondの成功は仕掛けてから10年近くかかりました。これは、弊社が商社だからこそできたこと。ビジネスデザインを旨とする弊社の理念にも通ずるプロジェクトで、こういった方向性が新しい仕事のやり方かもしれないと、やりがいを感じました。

現在も別のプロジェクトで、種をいっぱい撒いているところですが、いずれこのように花開いてくれたらいいなと思います。



奥がガラスベース、手前は雲母ベースの黒い光輝性顔料のサンプル

—ずっとお話を伺っていて、水科さんのお仕事、人を幸せにする側面もあるように感じました。

そう言っていただけると嬉しいです。満足するものを多くの方に使っていただきたい、それを材料の方から提案できないか、いつも思って取り組んでいます。

—水科さんは調色もご自身でなさるそうですね？

はい。以前は調色もしておりました。今は弊社ラボのスペシャリストと相談しながら進めています。色材を自分でさわってみて、この目で見ないとわからないことって多いんです。若い方はよくYou Tube観て、体験した気になりますよね、こと色に関してそれは通じません。本当に自分でやってみないとわからない。実物に触れて、自分の目で確かめることが、糧となります。



—先ほどのBlack Diamondの例を聞いて思ったんですが、何も無いところから何か新しいものを生み出すって大変ですけど、とてもクリエイティブなお仕事ですね。

この仕事って、「0を1にする仕事」なんです。それがとても面白い。今までほぼ私一人が進めてきたのですが、カラーをテーマにしたこの仕事を一緒にしてくれる人を、現在募集中です。社内で後に続く人材を育てて、私がいなくなっても撒いた種を育てて行ってほしい。そのためにはもっともっと種を撒かなくては、と思います。

また、最近は時代の流れも速いので、何が色の材料でウケているのかも、常にアンテナを張り巡らしていることも必要です。」AFCAさんのセミナーなどにもよく伺って、カラートレンドなど、いつも勉強させていただいています。

色はひとを楽しくし 異なる業種も一瞬にしてつなげる

—最後になりますが、水科さんが、色彩の勉強をされてよかったなと思われるのはどんな点でしょう？

一番は色の伝え方が明確になった点ですね。

ひと口に赤といっても、限りなくありますので、「青み系の明度がちょっと低くて、質感がマットな赤」といった表現ができるようになったこと。色の言語で想像をつけてもらえるようになったのが大きいです。赤っていろいろあるけど、どの赤だろうって迷うことがないのは素晴らしいことだと思います。色って誰でもわかるんですが、だからこそ奥が深いですね。

また、色はひとを楽しくするんだな、ということも痛感しています。色という言葉で、こんなにつながりが生まれるのは、ちょっと他ではないことかではないでしょうか。とても豊かな世界で、違うジャンル、業種の人たちとも一瞬にしてつながれるから不思議です。

—これからやりたいことは何ですか？

近ごろでは、仕事だんだん「もの」から「こと」にシフトしていつているのを感じています。「こと」で色の良さを伝えていかなければいけないということで、オープンイノベーションも積極的に取り入れ、企画することが多くなってきました。

美大の学生さんたちと産学共同で、「トライタン」というプラスチックのブランディングに挑戦しているのもその一例です。イーストマンケミカル社というアメリカの会社の製品なのですが、折り曲げても高透明で強靱で安全性の高い樹脂になります。昨年からガラスの代替商品としてあるファミリーレストランが取り入れてくださっているのですが、もっとこの優れた製品を世に広めたくて、美大の学生さんたちとトライタンのブランディングをあれこれ企画しているところです。若い人たちのクリエイティブな発想にインスパイアされて、とても刺激をもらっています。

こんなふうな、オープンイノベーションでできることも、あれこれ考えていきたいですね。



高透明で強靱な樹脂になる「トライタン」

公式テキストのここを

Check!!

下記のテキストページに今回のインタビューに関連した内容が掲載されています。

●2級

第4章1-2 色材の基礎 顔料

1-4-1 光輝材顔料とパール顔料・・・p.149

●1級 第2分野 商品色彩

第4章6-5 塗料の色彩と意匠・・・p.158